

川柳を通じて観たる江戸

著者	田中, 辰二
雑誌名	龍南
巻	2 0 4
ページ	1 - 5 2
発行年	1927-12-20
その他の言語のタイトル	川柳を通じて観たる江戸
URL	http://hdl.handle.net/2298/8976

川柳を通じて觀たる江戸

田 中 辰 二

此の一文は熊本國語學會で講演したものの拔萃でその概要は九州日日新聞社でも筆記發表しました。従つて御遠慮申したいのですが雜誌部の方から特に御依頼があるので此處に載せる次第です、御諒承下さい。柳句の下の括弧内の數字は「柳樽」の篇數で、拾遺とありますのは「柳樽拾遺」によりました。内容は極めて通俗的に話したのですからそのおつもりに願ひます。

ぐつと碎けて平民文學中でも特に平民文學たる川柳を通じて觀たる江戸の題でお話ませう。

川柳とは如何なるものであるかは十二分に知つてられる事と思ひますが、中に御存知ない方もあるかと思つてこゝに簡單に説明します。川柳は徳川時代に發生しました特種のもので俳句と同じやうな五、七、五の十七文字を基調とし而かも諷刺、皮肉、滑稽、うがちを生命とする通俗文學であります。併し通俗文學とは言へ短詩型の中であれ程よく人情の機微を囚へた文學は世界何れの文學にも見出し難いもので、寸鐵人をさすと言ふ言葉はよく川柳にあてはまるものと思ひます。

一人者の例で申しませう、一人者と言へば昔も今も淋しいやる瀬ないものでありませう。

親とも兄弟とも同棲してゐると言ふ譯でも無く妻子友達とも一所にあると言ふのでも無い眞に一人きりしかゐないと言ふのは心細い限りであります。

まさか天井の鼠に話しかける譯にも行かず所在なさに、よく外へ出掛けて遊びまはつてゐる。

一人者店ちんほどは内に居ず (8)

と言ふ川柳はよく此の消息を短い中に傳へてゐます。三十圓の家の家賃に住んでゐても三十日中二十七日は出て計りゐるやう

では事實二十七圓五十錢は外で暮すと言ふ譯であります。

一人者の一日の生活を眺めると朝早く眼をさましても寢床にすこしの執着も無い。でこそ
をしげなく床を離れる一人者（18）

である。朝起きて寢床を片附けるのも物淋い、ひどいになると年中敷きづめの萬年床と云ふのがあるが中には二つに折つてく
だけで五千年床位と云ふのがある。

寢床をへし折つて置く一人者（3）

であります。扱て起きてから食事の事ではありますが何が扱て一人者だけに無性は此の上も無い、昨夜からの御飯の残りがあいま
すれば、御飯むしのやうなものも用ゐなかつた時代、粥にしますとかおちやにするとかの工夫をするのでも無く、それだけの手
間をいとつて冬の嚴寒氷るやうな日でもその冷たいまゝの御飯をたべる、一口たべるとぶるツと身顫がする、喉を通るとつめた
さがぐんぐんお腹の方へと下りてゆくと云ふ代物を平氣で——否平氣では無いがやむなく面倒くさいので喰ふと言ふ始末で
一人もの胴ぶるひする飯をくひ（拾遺明和）

と云ふ句が見えます。それは

一人者御面倒なと二升たぎ（9）

など云つたやうな場合で残りの御飯のある事の話、残りの御飯が無いとすると焚かねばならぬ、初めそろ／＼中パツパの御飯も
一人者にとつては容易ではない。

親、腕ではかつてはとぐ一人者（4）

釜底で米をといでる一人者（14）

でやつととき終つたのを籠にかける日は一月の中にどれ程ありませう。
たまさかに煙を立てる一人者（10）

御製にも洩れしかまどの一人者 (拾、拾)

がそれを證明してゐます。「高き屋に上りて見れば煙立つ民の竈は賑ひにけり」の仁徳帝の御製にも洩れて一人者の竈はたまさかにしか賑はないと云ふ有様で、すこし要領のいゝ一人者になると隣などへ食物の徴發に出掛けると云ふ者もありましたらう。

一トわらひ笑つて飯をかりて行き (11)

笑はなくつてもいゝのに愛想わらひをして飯を借りてゆくので人間の弱さが此の句に滲んでゐます、敢て此の句は一人者とも限りませんが、

一人ものやれ茶をくれろ火をくれろ (14)

あつて茶をめつけてあるく一人もの (17)

になると大分隣などに迷惑をかける一人者であります。

ひやめしの時借をする一人者 (拾遺、安永)

と云つた句も見えます。お漬物などは勿論わが家で漬けない、隣へでも頼むのが關の山です。

香の物隣へつける一人者 (3)

扱て貰つて來ても切るのも面倒でせうし切る庖丁とても無い。まゝよ、どうなるものかといきなりかぎりつくると云つた無作法も

一人者にはあり勝でせう。

香の物へし折つて喰ふ一人者 (4)

など云ふ句も見えます。併し一人者必ずしも家に漬物をつけぬと限つたものでも無く中に無性で無いのは漬けもしましたらう。

一人者死ぬとぬか味噌までさがし (23)

と云ふ句もあります、一人者が死んだ、ひよつとぬか味噌の中にでも金でもかくして置きやしなからうかと慾深連中がさがすのであります。

一人者にとつて兎角炊事は大事であり、従つて味噌を買つてもするやうな事はまづ省略する、文明と云ふものは、一面から觀ると無性になる事で今日では都會地などへ行くとすり味噌と云ふ無性味噌がありますが徳川時代にはそんなものは無い、どうしても味噌はすらねばならぬ、すらねば悪いと云ふ規則も無いが磨つてうまく喰はうと云ふのがまづ人情で自然の形であります。一人者はそれは知つてゐる、知つてはゐるが面倒くさいのであります。

一人者味噌は買へども音はせず、（14）

柳樽五十五篇の

味噌は買へども音のせぬ一人者、（55）

は此の句の作りかへであります。摺鉢の鳴るやうなのは餘程小まめな一人者です。

摺鉢の鳴るは小まめな一人者、（27）

摺鉢の音ぞゆかしきひとりもの、（43）

など云ふ句もあります。此の最後の句、摺鉢の音ぞゆかしきは「雲の上はありし昔にかはらねど見ぬ玉簾のうちぞゆかしき」と云ふ謡曲「鸚鵡小町」の中の歌の文句をもちつたものであります。

餅のある内はなまける一人者、（10）

も、やつと御飯にありついて

先御膳すんだはなどひとり者、（拾、拾）

で一安心しましたが、さあそのあと片付が面倒であります、之はわれ／＼の自炊生活にもよく感じます事で

一人者くつて仕舞つて苦勞がり、（4）

は此の消息を明にしてゐるものだと思います。御飯はそれで善いとした所でそれから何から何まで不自由であります、着物にほころび一つ出来ましても男の一人者となると始末に困ります。

ひとり者ほころび、一つ手を合せ、 (3)

手を合せ拜んで頼みまはり、やつとほころびをぬつてもらふのは悲慘なものです、世間のかみさん達は、この可憐な一人者をよくひやかしまはる。

一人ものかみさん達になぶられる、 (12)

一人者の生活にはういつらいものがあります。

憂いつらい時腹の立つ時には

一人者小腹がたつと喰はずに居、 (2)

などと云ふ場合もあります。

一人者内へ歸るとうなり出し、 (1)

と云ふ場合もあります、そして寢たところで

ふきげんの寢ても直らぬ一人者、 (13)

で、どうしても腹の蟲が納まらぬと云つた場合もあらうかと思ひます。そんな時は外へも飛び出しませう、幾日も家をあける事もあります。

かなづちで度々あける一人もの、 (9)

は幾日も家を出てゐた時の句であります。その間には一人者でも相當に留守中用事がたまつてゐませう、言傳や手紙などもお隣で代理して聞いたりうけとつたりしてくれてる事でもあります。

甲向きの隣へたまる一人もの、 (15)

の句はそれをして居ります。

この淋しい一人者に友達が訪問してくれる事はよろこばしい限りであります、その友達も「遠方より来る又樂しからずや」

と言ふやうなのは善いが俄雨にでも逢つて一本しかない傘を借りにくるやうな友達は何ない。

傘かしてふりこめられる、一人もの、（45）

外出も出來ずたれこめて悄然としてゐるなどと云ふのは一人者にとつてあり難くはない。かと思ふと又一方にはこんな友達もある、何時までも長座して先方の迷惑などはすこしもお構ひが無い、食事時になつても尻を落付けてゐる。お蔭と友達に食事をふるまつた爲自分の喰ひ物が無くなる。

友達が來ちや、闕所する、一人もの、（17）

の句はそれをしてゐる。闕所は財産を沒收される事です、此處では食事をさしてゐます。そして待たねば暮るゝに早い一日でも非常に長く感じて

一人者よいやらさつところり寝る（34）

でへし折つて置いた寢床にもぐりこんで冷たい夢を見ると云つた段取になる。それが一人者の生活であります、それは無事な時の事病氣にでもなつても誰一人看護してくれる者もなければ醫者を呼びに行つてくれる者もなく、頓死でもした時は猶更あはれなものであります。

一人もの内からしめて頓死する、（5）

の句は笑ひの中に多少の涙をもつてゐます。

一人者に關する川柳を集めましても随分あります。唯今申し上げましたのはその中のほんの一部に過ぎないのでありますが、川柳と云ふものはかく通俗に人を取扱つて居る事に御理解が充分につくと考へましてあげたのであります。

而かもその中には到底他の文學では云ひ切れぬほどの人情の機微をうがつた名句をよく見ます。例へば母親を歌つた句で

添乳して、遂洗濯が夢になり、（拾遺、寶曆）

子を思ふ母親、赤兒を添乳してゐる間に疲れてぐつすり母親も寝ころんで子を寢かしつけてから洗濯をしようと思つた考も夢

となつてしまふ。ありがちの事で珍らしくは無いがそれを巧に捕へて來たのが此の句の生命です。

母親も、ともにやつれる物思ひ、 (1)

娘はこの頃とかくやつれてゆく。病の爲か他の原因か。それを見る母親も苦勞の絶え間が無い。娘を思ふ母親の身もげつそり疲せて行く計り。娘も母親も。人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に迷ひぬる哉であります。

外へでも寝おれと母は戸をあける (32)

死なば死にやなどこは、母は言ひ、 (6)

名吟であります。子供は此の思ひが叶はねば死ぬと言ふ。それを叱る母親の心持、死なば死にやなどこは、母は言ひを繰返して讀んで見ますと流石川柳は人情の奥底をねらつてゐると氣づくのであります。父親ならガミ／＼と目玉のぬけ出るほどに叱る所でせうが母親は女だけにやさしい。

目の玉のぬけ出ぬやうに母叱り、 (53)

であります、其の爲に

母親は勿体ないがだまし、 (1)

と言ふやうな感じを放蕩の息子達に懷かせるので

四百づゝ折々母はたばかられ、 (拾、拾)

など言ふ句も見えます、四百づゝと申しましたのはいゝ加減の嘘での意であります、四百は嘘八百の半分です。

恠うした人情の機微を歌つた句を集めましたらキリがゝいけません、川柳の殆んどすべては何事かを歌ひ何等か人情にふれてゐる。それは川柳が人情詩である限り當然の事であります。

所が此の特種の文學が弄ばれるのは下層の階級が主で、一般には貴ばれなかつたのであります。川柳は下品であり士君子の口にすべきもので無いとまで考へてゐた向きもありますし現にさう考へてゐる人々も世間には相當に見出されるのであります。何

故かならば川柳は人情詩であります、人情に重きを置いて歌つた短詩であります。所が徳川時代はおそろしく形式的の儒教や武士道が流行した時代であります、私は敢て形式的と申します、立派な教義はそれは一部の人々に守られたでありませうが大部分は人間の心が崩れて居りましたのが徳川時代の真相であります。教義は教義、行爲は行爲と兩者が飛び離れてゐる形式的の儒教武士道では仕方が無い。儒教主國のやうに見える徳川時代の真相に喰ひ入れれば一面いやな陰のあるのを情なく思ふのであります。が兎も角社會の上層表面には恐ろしく形式的の儒教武士道が漲りあふれてゐたのであります。

此の精神は家康の獎勵に基く所が多かつた事は事實であります。扨て其儒教武士道を強調された武士——社會の最上層に立つ武士——の生活を眺めますと形式的の教義では悉く禁欲精神がその土台となつて居ります。武士はくはねど高揚子、鷹は餓えても總をつまずの如き言葉はそれを匂はせてゐるのです。禁欲はつまり人情のまゝに行動をしない、あれがほしい之がほしいと云ふ場合にも目をふさがねばならぬ、女々しい戀愛生活の如きは武士の赴いてはならぬ所で、女子と小人は養ひ難しであるからそんなものを近付ける事もよくない。唯さへ勢力を失つて來てゐる女の人格を全くふみつぶしてしまつたのが此の儒教武士道の流行した徳川時代で何かすると「女童の知る所にあらず」と斥けられる。こんな有様ですから極度に人情をさけて義理などに重きを置き情を無視して意志を尊重したのであります。慙うなると第一に落第するのは川柳であります、その無視しなければならぬ情が川柳の生命でありますからやむを得ない。否、徳川時代に無視され武士から表面的に白眼視されてゐたものに演劇もあります、お能は武士階級の中にも盛んに行はれたもので彼等の一つの娛樂でもありました、あのバサ／＼の謡曲から一步人情味の方へ入つてゐる歌舞伎狂言は武士の見るべきもので無いと考へてゐたのです。江島其磧の「世間娘氣質」の中にある侍の娘が町人に貰はれて亭主から芝居見物に誘はれた時に「常の女ならば此の思立やまぬやうにと平常にないしほの目をして亭主が機嫌をとるべきに」此の女は

「お言葉にそむくは不禮ながら常々親共の申付けしは、月雪花の眺めは格別、其の外の見物事は四座の能の外は女の見る物にあらず、殊更當世の歌舞伎狂言、いたづら事を第一に立てゝ不作法なる行跡をして見すれば人たるものゝ娘の見る事は勿論又咄

も聞くものでなしと堅き誠、こればかりは御免あれ」

と斷つてゐるので亭主から「夫が連れて行かうと言ふ芝居を見まいとは我儘千萬、今の世に芝居を嫌ふは生れぞこないと言ふもの、たはけた事を言はずとも早く辨へよ」と言はれて女房は顔色かはり「如何に男なればとて諸侍の娘を生れぞこないと惡名つけらるゝ段、如何にしても女の一分すたつて先祖の佳名迄よごす事口借しき次第也、身不肖なれども妾が先祖は長尾景虎入道謙信の家臣三輪兵部太輔俊貴が子孫、世につれて町人風情の女房になるさへ無念なるに賣人ばいじんに生れぞこないのたはけ者とさみせられては、親達までの恥辱なれば近頃相手には不足には存ずれども夫婦の誼に相手いたして進ずれば嬉しいと思召し最後の御用意なさるべし」などと亭主に決闘を申込むやうな物騒な女——勿論多少の誇張はありますが——も多少はあつたでせう、武士が謡は好むが芝居演劇の類は好まぬと言ふのは後者が遙か人情味に於て勝つてゐる所があるし武士はその人情に目をふさがねばならぬ場合が多くあつたのであります、川柳もかくして武士からは下等なものと考へられたのであります、現代も徳川時代のつゞきとして川柳を下らぬものと思つてゐる人のかなりにある事も是非も無い事であります。而かも御承知の如く徳川時代は例の階級制度が嚴肅に立てられて武士と町人と云ふ二大階級の對立となり、上から互に相犯す事無からしめられたので兩者の趣味性の相違は兩者の文學に劇然たる區別をつけたのであります、そして此の對立した文學は何處までも表面上は違つた趣味性の上に立てられてゐるだけ互に融合する事なく進んで參つたのであります。

若し徳川時代に此の兩者の趣味性が妥協を見たらもつと元氣澄渾とした高尚な文學を生んだのでありませうが遺憾な事には階級制度が此處にも崇つて武士等の弄ぶ文學は上品ではあるが陳套な月並式のものであり清新味の缺けたものとなり、一般民衆の弄ぶ文學は清新味があり澄渾としてそこに獨創味が多いが一面下品な所が伴ふと云ふやうな譯でありました。併し今日の眼からいたしますと徳川時代の文學で最も興味あり又價值ある部分は平民文學であります。

今、日本文學史を繙いて見ましても之までは眞の平民文學と稱するものは無かつた事に氣付かれませう、萬葉集には庶民の歌のやうなものも載つてゐるには載つてゐます、併し官吏が中心となり、あれにのせられてゐる歌も、多くは官吏關係の人々の歌や

さなくば官吏を通じて記載された歌が大部分占めてゐるので之を直に平民文學なりと言ひ切る事は出来ません、平安朝文學は純然たる貴族文學であります、平民は所謂賤しがつて、あやしきものでも眼中には無かつた時代であります、鎌倉室町期の文學は多くは僧侶隱遁者の手になつたもので之をして平民文學と申す事は不可能であります。

斯く觀じて参りますると本當に平民が文學と握手の出来ましたのは徳川時代からで既に元祿時代には新興の文學が目ざましい活動を續けたのであります、談林派の俳諧を去つて浮世草子に筆をそめた井原西鶴は恐らく町人の出であると思ひますが此の元祿期の上方文學を飾る大立物の一人であります。淨瑠璃作者の近松門左衛門、俳諧師の松尾芭蕉は何れも武士の出であります、既に武士の殻を脱しその羈絆をのがれて又平民文學の爲に氣を吐いたものであります、西鶴、近松、芭蕉の三人は期を均しくして出でた平民文學界の大立物で三人の行き方は異つてゐるにしましても在來の因襲化した文學から新しい境地を築いて行つた人々であります。

更に時代が下りますと平民文學は益々榮えて行きます、質は劣りましても量は非常に殖えたのであります、その際にあたりまして平民文學中でも最も平民的色彩を持つた此の特種の文學なる川柳は生れ出たのであります。が前申します通り徳川時代に於きましても又その引きつゞきの現代に於きましても一部のものからは兎角白眼視されます川柳も近來盛んに研究され出して來ました。之は頗る結構な事であり徳川時代の制度、慣習、迷信、言語、風俗などを研究するにも善い材料を提供してくれるものだけに其の研究はやり様によつては頗る有意義だと考へます。徳川時代にはあの明治の初年河竹默阿彌の作りました「天衣紛々上野初花」の中の河内山宗俊が松江侯の邸の女關先で云ひます台詞のやうに「かの下々で弄ぶ川柳と云ふ雜俳」と考へてゐたものが多いにしましても人情の機微をうがつと云ふ點から、苟も奉行になる爲には必ず川柳が解せられるやうなものでなければその資格は無いとされたものです。現今では毎年高等学校教員の檢定試験の中に川柳の問題がつけ加へられるやうになりました受験者の常識を見るには一番都合がいゝと言ふやうな事を私は承つて居ります。即ち昔は奉行試験の一科目であり今は高等学校教員試験問題の一つであります、移ればかはる世の中ではありますが當然の事と思はれます。併し川柳の研究などと申しまして

も其の實非常に困難なもので高等教員の試験問題に出ますやうな川柳は、川柳研究者の方から申しますと先づ尋常科の試験問題であります、川柳には困難がつきまとつてゐるもので昔は扱て置き今日でも一句残らず完全に解釋をつけ得る人は日本に一人も居りません。日本にゐないのでから世界中に一人もゐない譯で將來に於ても矢張りさうだらうと思ひます、その位川柳は六ヶしいもので川柳の研究には是非とも人一倍の常識と廣く諸般の事に亘つて澤山の書物に目を通す事が必要となつて來まする爲どうしても年月が要るやうに思はれます、従つて川柳の研究はまだ〳〵將來があり餘地はいくらもあるのですあります。

扱て川柳を通じて見た江戸と申しましても前以て考へて頂かねばならぬ事は、時代と範圍と及び傾向とであります、私共徳川時代の文學を攻究して居りますものは便宜上徳川時代を四つに分けて見ます、即ち

第一期 啓蒙時代（寛文時代）——慶長八（A.D.1603）——延寶八（A.D.1680）】

慶長、元和、寛永、正保、慶安、承應、明暦、萬治、寛文、延寶

七十八年間 中心地 京都

第二期 發展時代、第一爛熟時代 【天和元（1681）——元文五（1740）】

（元祿時代）

天和、貞享、元祿、寶永、正徳、享保、元文、

五十九年間 中心地 大阪

第三期 文運東遷時代、過渡時代 【寛保元（1741）——天明八（1788）】

（明和、安永時代）

寛保、延享、寛延、寶歴、明和、安永、天明

四十七年間 中心地上方——江戸

第四期 第二爛熟時代 【寛政元（1789）——慶應二（1867）】

川柳を通じて觀たる江戸（田中）

（化政時代）

寛政、享和、文化、文政、天保、弘化、嘉永、安政、萬延、文久、元治、慶應

とが之であります。

川柳は何時出來たものかと申しますと第三期の中頃寶曆明和安永天明を中心として勃興しはじめたのです、そして第四期を通じて、更に明治大正昭和にも及んでゐます。併し寶曆明和安永天明あたりの句は碎けた中にも何處か明るい愉快な所があり笑ひもわざとらしい作り笑で無くて心の底から盛り上つて來る笑の句と云つたものが比較的多いやうです。之が後になるほどわざとらしい笑の句が加つて來まして言葉の駄洒落や地口を弄ぶやうになる傾向が加つて參りました。わざとらしい笑を言葉の洒落や地口でつくる句は我々川柳を研究して行きますものには狂句と申して一段川柳より低い地位に置いてあります。例へば娘の句で申上げませう。

ひなの酒、みんな吞まれて泣いてゐる、
（7）

は可愛い小さな娘であります誠によく描けてゐる。深い技巧もなくありのまゝに讀んだだけですがその光景をうかべてゐます。
いゝ川柳であります。

わが好かぬ男の文は母に見せ、
（4）

あの男この男とて古くなり、
（12）

天とう正直あばたが實れ残り、
（12）

こはいもの見たし牛娘封を切り、
（37）

等もありのまゝによんで其處に滑稽味や皮肉味を極く自然的に浮べてゐます、すこし理智的に流れました文句とり

見に來るか見に來るか日々新た也、
（拾、拾）

は湯の盤の銘、

らう、だ、け、た、娘、必、ず、隣、あ、り、
(拾、安)

は徳孤ならず必ず隣ありの左傳の文句取、之等もまだ自然な所があつて、川柳としては悪くありません、所が

古、近、江、で、岡、崎、を、ひ、く、お、姫、様、
(11)

西、行、は、白、猫、娘、黒、い、猫、
(31)

丙、午、ゑ、ん、ど、う、氏、の、娘、也、
(38)

の如きはどれもわざとらしさがあります。

古近江の句は近江とか岡崎とか云ふ地名を並べて其處に無理な興味をつないだのであります。古近江は上等の三味線でありま
す。岡崎と申しますと岡崎女郎衆云々と申します三味線唄の初歩にやりましたもので、そんなに初歩から古近江のやうな上等の
三味線で稽古するのはお姫様なればこそと云つたやうな心持を出して無理に笑はせようとしてゐるのであります。西行はの句は
西行の逸話としても有名なもので曾て僧西行は頼朝から白銀の猫を買つた事がある、その時西行はそれに何等の執着も持たずに
頼朝の館を出ると直ぐ門前で遊んでゐた子供にそれを與へて去つたと云ふのであります、でこそこゝに西行は白猫と持つて來た
のです。娘黒猫とは徳川時代の娘さんは引込思案のものが多かつたのであります、そして中には勞瘵になるものもかなりあつた
やうです。勞瘵と申しますと今日の肺病などもそれでありますがもつと實際は範圍が廣いやうに川柳から推定されます、即ち唯
今の神經衰弱、氣鬱症なども此の中に含まれます。此の勞瘵を病ひました時には治療法としましては灸點を施しましたやうです
が一面迷信も伴ひまして黒い猫を飼つたやうです、猫は魔物と思はれたのであります、黒猫は勞瘵病の魔除けと思はれたので
ありませう、その黒猫黨の娘をこゝに引きつり出して來て白猫、黒猫の對立した語で無理な興味を求めようとしたのが此の
句なのであります。丙午の句は悪い俗信で今日でも下らぬ方面には御幣をかつぐ人もありますが丙午は陽の陽に屬するもので此
の年に當つた女は幾人も夫を代へると云ふので兎角良縁が無かつたものであります、縁遠いと云ふのをわざと遠藤氏などと云つ
て滑稽味を導き出さうとしたのでつまらぬ技巧がめづられ、すら／＼として而かも人情の奥底をうがつた句に比べますと非常

な遜色があります。人をくすぐつて之でも笑はぬか、之でも笑はぬかと云つたやうな態度が見えます。

之を我々は俗にくすぐりと云ふのですがくすぐりを持つた句は狂句と申して川柳から離して考へます。川柳の寶典たる柳樽と云ふ書物は明和以後今日まで百六十六篇出てゐますし、其の他の句集の集めますと句数は數十萬に上りますが末になる程此のくすぐりが多くなつて参ります。

よくいへば、わるくいはるゝ後家の髪 (55)

のやうな句は決して名句ではない、川柳の邪道であるのに堂々たる文學史にこんな平凡句のあげられるてゐるのは頗る心外な氣がします。それは第二として置きまして川柳の示す時代は第三期第四期が中心なる事を御記憶願ひます。

次に場所であります。川柳は江戸にもありましたし川柳らしい形式のものは大阪にもありました。それは蕉風の俳諧の爲に勢力を失ひました談林派の宗匠共が多く川柳の點者をやつてゐた關係で嘗て大阪は談林派の中心地であつたからでもあります、第三期頃は既に文運が東、江戸へ移りかけて居りましたので大勢を盛りかへす事が出来ず江戸が中心なるかのやうな感じを持たせました、また實際上大阪に多少川柳らしいものがありましたも江戸のそれに比しますると微々たるもので數へるに足りません従つて川柳は江戸の民衆文學であつたと云つても差支はない、勢ひ川柳にあらはれました背景は八百萬石の將軍の御膝元なる江戸なる事を御承知願ひます。次に傾向から御注意が願ひたい。川柳は皮肉、滑稽、うがちを生命とする文學であります。

代脈がちと見直した晩に死に (拾遺、拾遺)

醫者衆は辭世をほめて立たれたり (2)

何ぞ聞かうかと代脈苦勞なり (14)

などは皮肉味を持つた句で而かもあり得べきものでありませうが、時にはその皮肉味を強く出したり滑稽味を大きく出す爲に誇張法を用ゐる事が多くあります、代脈とは今日の代診です、

代脈答へて死生は天にあり (14)

戴、醫、者、が、入、つ、た、家、に、殺、氣、立、ち、

(13)

などは誇張して居ります。従つて川柳を眺めても時には或る程度の割引をして考へねばならぬ事も往々ありますから之は注意せねばならないのであります。

扱て之だけの注意を以て川柳を眺めますると其處に映りまする江戸と云ふものゝ世相は、あまり馬鹿げてもゐますが、又今日の人間の思ひもつかぬやうな粹や滋味を一面に持つてゐる事に氣づくのであります。

前申しました様に江戸は徳川將軍八百萬石の御城下であります、この大名が豪いの、國守がえらいのと申しましても將軍の前には頭が上らなかつたものであります。この有様は江戸の民衆が極めてよく見抜いて居りました。道中でもします時東海道第一歩目の宿場品川を一步でも踏み出すと大名の行列には土下座をせねばならぬ町人も、江戸四里四方の中にあれば大丈夫、將軍の御威光で土下座をせずとも濟むと云つた譯で格別の相違があります。我々は江戸ツ子だ、江戸で生まれて江戸の水で産湯をつかんだと言ふ事が江戸ツ子の誇であつた事も當然過ぎる程當然でした。三田村鳶魚氏などは江戸ツ子を狭隘な魚河岸の兄イ連やつ神田ツ子の一部の下層のものにとるやうですがそんなに狭くとるには當らない、成程後にはその邊に江戸ツ子の心持の一面が残されたには相違ないが江戸時代もさうであつたと考へる必要も無いかと思ひます。江戸ツ子が江戸を禮讃するのも當然であります。

繁、昌、さ、家、根、か、ら、家、根、へ、虹、が、ふ、き、

繁、昌、さ、月、の、入、る、べ、き、草、も、な、し、

繁、昌、さ、す、き、は、二、度、の、月、ば、か、り、

武、藏、野、は、中、の、一、字、で、お、つ、ぶ、さ、ぎ、

掃、溜、の、中、へ、は、下、り、と、こ、も、な、し、

掃、溜、は、お、恐、れ、多、い、た、と、へ、な、り、

噓八百よりも八町多い江戸の八百八町の繁昌さは諸國の掃溜と云はれるだけに格別で武藏野の草などと歌はれたのは昔の事、今は月の入るべき草もなく薄さへ八月十五夜と九月十三夜の二度の月見の時見る計りで藏で押ツぶさぎ掃溜に鶴と云ふ言葉はあるが鶴さへ下りることは出来ない程の賑はしさであります。併し考へて見ると江戸の住民の中には武士も多かつた、旗本八萬騎とは噓でそんなにはゐなかつたが俗に八萬騎と稱する旗本や御家人、扱は諸國諸大名の家來迄の江戸詰の者達で武士はかなりゐた、而かも將軍のお膝元だけに表面でも左様然らばと堅くなつてゐねばならなかつたのでした。

武士は階級制度を布かれた徳川時代にはその最上層に立つものでありましたが元祿期にはもう既に町人に事實頭が上らない様になつてゐたのであります。詳しく御話申しますと長くなりますから簡単に申上げて置きますがさうさせた原因は何かと申すと生活難からであります、御承知の様に武士と云ふ職業は戦争の時に必要なものでありますが今時の兵隊さんと違つて平和な時は無用の長物でありました。殊に階級制度が嚴肅に守られますと武士は何處までも武士であると云つた譯であります、爲に益々生産的の方面への努力をする事が出来なくなつてゐました。戰國時代の武士はそれでも平和の時は國に歸つて耕しもすれば生産にも與つて力がありました、徳川時代の武士はその中心になるものを除いては全く不生産的の穀つぶしでありました、が西鶴の「永代藏」の言葉では無いが「生あれば食あり」で生活の爲にはどうしても喰はねばならぬ、そこで武士も喰ふ。喰ひは喰ふものゝ三百年の平和は武士をして全く光なきものとしたのであります。そして既に元祿期頃は武士も大體墮弱の域に達しかけてゐたのであります。何故かならば喰つて行く事が出来ない。それがその大きな原因であります。何故喰つて行く事が出来ないか。かいつまんで申上げると江戸時代の武士の唯一の収入は米でありました。而かもその収入は減りこそすれ殖ゑる事は先づ無かつたのです。それも主君と共に戰場に馳驅して死生の境に飛びまはつた先祖の武士は死生を共にしたと云ふ微妙な關係から祿高の如何には左右せられぬ美しい主従の情で結ばれてゐたのであります。時代が下り祿が世襲されて來るに及んで主君と死生を共にしたと言ふ感じは全く忘れられて唯祿高で結ばれてゐると言つた感じが順次つき加つて來たのであります。而かもその祿なるものは米であります、金ぢや無い。此處で考へて頂かねばならぬ事は祿高と實収入であります。十萬石の大名が一年に十萬石とる

と思ふと大間違であります。十萬石の大名と申すと収入高の見積約十萬石ある土地に封ぜられるので成程その土地から十萬石の米がとれるには違ひないが、それがすつかり大名の懐に入つて来るのでは無い。最初は四公六民でその四割の四萬石が十萬石の大名の収入でありました、が之では苦しいと云ふので後には稅律が改つて五公五民となり十萬石とりの大名の収入は五割即五萬石となつたのであります。十萬石の大名の収入が本當は四萬石乃至は五萬石と申してもまだ鵜呑みにして頂いては困る、その四萬石、五萬石も穀のついたまゝの石高で之を普通の食用に供する爲につきますと半減するものと見て二萬石乃至二萬五千石の白米しかとれぬ譯であります。十萬石の大名の實収入は二萬石乃至二萬五千石であります。十萬石の大名には十萬石だけの格式を持たねばならぬ、夫婦共稼ぎでやらうなんて安値には出来ません、澤山の家來も置かねばならず、隔年に參觀交代もせねばなりません、時には幕府から加役も命せられます、従つて大名風を装つてゐましても内輪にまはりますと火の車をまはしてゐたものが多いので豪商から盛んに金を借りる。表面はゑらがつてゐるが裏面は町人の前に頭をペコ／＼と下げたものであります。元正間記にあります大阪の富豪淀屋辰五郎の口述を見ましても一淀屋が西國の大名に金をかしつけぬ所が一軒も無い、その内證文を見ると細川黒田二軒で三十萬兩と云ふ金ねてゐたりとあります、ねてゐるとは返却しないのであります、三井の祖の三井高房の書きました「町人考」を見ましても武士には金を貸すな、借りるときはうまいことを云ふが返済をせまると「お斷り」の一言のもとにはねつけると云つたやうな記事が見えます、實際大名の内輪は比較的樂では無かつたのです。小大名は猶更大大名でも苦しく、あの大大名である加賀百萬石の前田家が將軍を江戸の藩邸——今日の東京本郷の帝大の所です——へ御招待した爲に要した費用を埋めるのに前田百萬石を以てすら三年間かゝつたと云ふ位です。お蔭でその爲に破産された町人もあります。矢張り大大名である仙臺公が參觀交代の費用が無いので家來の祿高の頭をはねた事も有名な話であります。

祿高の頭をはねると云ふのは例へば百石とりの武士には御主人が物入であるから二十石借用するの五十石借用するのと云つた形式で事後承諾を求めるだけで而かも一度借りられると返しつゝ無い斗りか永久に元通りにならない。それが誰も彼もだから堪つたものでは無いのです。従つて之は藩によつて違ひますが半知とか三ツ成とか申しまして大概の武士は祿高の半分乃至は三分

の一位しか支給されなかつたもので百石取の武士が先づ三十石内外の米を貰つた勘定となるのであります。

所が今日では他の物價は米と平均して上つたり下つたりする。が徳川時代は物價は高くなりましたが反對に米の相場は特別の饑饉年や其他の天災地變の無い限りはぐつと下つたのであります。之には諸種の原因があります、物價の上りましたのは私はその原因を貨幣の改鑄や都會生活の發展に基くものと考へて居ります。米の下ります原因は百姓も幾分のゆとりをつける爲に米などは常食とせずに出して仕舞ひ武士も祿高の來るまで待ち切れず封祿を抵當に入れて金の前借をして仕舞ふと云ふ有様で、需供給の關係がうまく行かず米が餘るばかりであつたからです。八代將軍吉宗が米價の調節を計つたり幕府が江戸灣へ澤山の米を埋めたなど云ふ噂の立つたのも武士を救済する苦しい一方法であつたのであります。米を唯一の收入とする武士の收入はすくなく支出は多いと云ふやり切れぬ有様になつてゐたのです、それは既に元祿期に於て然りであります。既に生活に餘裕が無いと云ふよりもどうしてもやり繰がつかぬとなると此處に借りねばならぬ、借りて一時を糊塗し瀾縫しようとする、が、借りる時の佛顔返す時の閻魔顔でお斷りくをくはすと終には町人も貸さなくなる、貸されないと生活上武士は困らねばならぬ、そこで必ず何時何時までにはおかへし申す、御返ししない時には門口でお笑ひ下さるも苦しまじくと云つた證文を書いて借りて行くと云ふ譯で、いよく返済の出來ぬ時は本當に門口で大聲でわめかれ笑はれても仕方が無かつたのです。八代將軍吉宗の享保頃——文學で申しますと第二期の元祿期の終りでありますが——その頃は武士が往來で馬の手綱を握られて町人から借金催促を受けてゐる事も珍らしく無く人前で武人が町人にペコ／＼お叩頭してゐると云つた醜體も演じたものであります。従つて町人は武士よりも遙かに力ありと考へるやうになつて來た事は山内幸内と云ふ武士が八代將軍に訴へた言上書なるものに明に物語つてゐます將軍家でも武士を救ふ爲に拜借金と稱する臨時ボーナスを武士に出してもしたし武士唯一の收入たる米の價を引上げようと米價調節策を取りました。けれども武士の救済策は結局一時を糊塗するだけで何の役にも立ちません、いはゞ燒石に水で、さうなると餘程心の堅固でないものは武士は喰はねど高揚子ではゐられず背に腹はかへられないと云つた風になります。先代萩の千松の文句ぢや無いが「お腹がへつてもひもじうない」と云ひ切る事が出來ない。誇張化した文藝には澤山さうしたのも出て來るが

實際の武士の多くは益々墮落して來たのです、私はいつも徳川時代の瓦礫の原因は此の米と金との問題がうまく行かなかつたのにも一因があらう、そして瓦礫の萌芽は既に元祿期に生じてゐたと信じます。此の事は嘗て大阪朝日や國語國文學、福岡日々新聞などに論じた事もありますから御覽になつた方もあらうかと思ひます。扨て武士の墮落に伴ふ町人の方面はどうかと申しますと町人は初めから武士のやうに八釜ましい規則に拘束されてゐなかつたし格別の束縛もなくたゞ贅澤をしてはならぬ絹衣服をつけてはならぬと云つた位のおふれが關の山でありました、そして金をためる事は武士と違つて平氣である、でこそ、町人は早いとして士農工商と階級の一番どん底に町人を置いたのでありますが、既に金が出来ると、階級は下でも實力はあると云ふ譯で大町人になると威張つたものでありました。勿論澤山の町人の中にはうんと儲けたものもあれば反對に失敗したものもあります誰も彼も儲けたと云ふのではありませんが儲ける事は町人として一向差支なかつたのでありました。扨て儲けたとしますとそれをどうするか。西鶴の「日本永代藏」に

「……此の人数多の手代を置きて諸事をさばかせ、その身は樂しみを極め若い時の辛勞をとりかへしぬ、是ぞ人間の身の持ち様なり」〔「祈るしるしの神の折敷」〕

又

「人は十三才までわきまへなく、それより二十四五までは親のさしづを受け、其の後は我と世をかせぎ、四十五までに一生の家をかため遊樂する事に極まれり」〔「全上」〕

とあるのが當時の町人の心持であつたと思ひます、いくら金をためても階級制度は嚴然としてゐて町人が武士にはなれない、従つて金をためれば生活は樂だがそれだけの事で、武士に借り倒されたり、ともすると贅澤だと云つて關所——つまり財産沒收を其の筋からくへば何にもならない。一層使つて樂しい事をしてしまへと言ふ氣になる、老いて遊樂する事に人生の本意があると考へたのは一町人西鶴のみならずすべての町人の考へる點であつたのです、然らばその享樂を求めるにした所がどう費ふか。表面は贅澤は出來ぬ、絹着物も許されぬとしますと他へ勢ひ向けねばならない。尤も絹着物を許さぬと云つた徳川幕府の禁令も

實際はあまりたいして功が無いので幕府の目の届かぬ地方では絹着物位つけるものも出来て來ましたが江戸ではお膝元だけに幕府の目を恐れて表面には金を費はす一枚上着をぬぐと金目のものをつけてゐると云つた風で所謂しぶ味と云ふものがついて來てゐます。それは衣裳などについてのお話、煙管なども先づ飛び切りの贅澤なのが銀製のもので

銀煙管、落した噺三度きい、

銀煙管銀のやうだと親仁、云ひ、

などの川柳も見えます。喰ひ物なども元禄期から此後は非常に殖えました。それも享樂の一つのあらはれでありませう。

併し町人の享樂が最も強く與へられましたのは何と申しましても演劇と遊廓でゐました。何しろ武士よりも素養の低い町人でありまして金がうなつてゐる人でありまして、その町人がこうした所に享樂を求めますのも自然の道理でありませう。今日不愉快な存在である遊廓なるものが徳川時代に非常に發展し、平民文學の一半に勢力を及ぼしてゐる原因としましては

1. 形式的儒教武士道の弊害

2. 町人の富の増加

3. 町人の素養低い事

4. 演劇の發展に伴ふ誘惑

5. 徳川幕府の遊廓保護政策

等を私はあげて居ります、尤も之は私だけの意見でまだ足らぬ點があるかも知れません。

此處で考へて頂きたい事があります、男女七才にして席を同じうせずと申しますが儒教、その儒教の精神を随分と加味いたしまして、養ひ難き女子や小人を近付ける事を女々しいと思ひ、不義は御家の御法度と思ひ、自由戀愛を不義と觀じ、結婚にも肝腎の當人同志の自由意志は認めずに愛なき結婚でも親が強いて平然としてゐたのが禁欲思想を根柢とする武士道であります、之等が強調されゝばされる程戀愛は否定され、戀愛する機會は先づ與へられないと云ふのが普通の狀態でありました。殊に女性

紅葉には雀しなよくとめぬ也（化）

傾城のほまれ米倉うごかせる（安）

黄金花さくみちのくの客をふり（政）

萩の土地紅葉はとんと植付かず（化）

十九文、ほども持てない伽羅の下駄（安）

などは高尾に振りとはされた伊達綱宗（又は綱村とも）の事をよんだものであります。

紅葉と申しますのは三浦屋の抱太夫高尾の定紋であります、雀は云ふまでもなく竹に雀は仙台様の御紋で伊達綱宗をさしたのです、傾城は一流の太夫を云ふのであります、米倉と申しましたのも仙台米の入つた米倉で云ふまでもなく綱宗公です。黄金花さくみちのくの客も同様で此の句は「すめろぎの御代榮えむと東なるみちのく山に黄金花さく」の大伴家持の歌の句を引用して奥州仙台を云つたのであります。萩の土地と申しましたのも仙台萩の産地の仙台でそこに紅葉の定紋の高尾は適しないと云ふのであります。十九文ほどの句の十九文は

十九文下駄にて息子追出され（安永）

などの柳句から見ましてもわかるやうに吉原通ひする時に用ひたかけながしの下駄であります。伽羅は綱宗公が贅をつくして三浦屋へ通ふのに香水伽羅の下駄を使用したとの俗傳に基くので

歩く度一二兩づゝ下駄がへり（天明）

雨は秤のかけ目であります。

毘首羯磨の作ともいふやうな下駄（安永）

下駄屋でも餘ッ程伽羅を盗むなり（安永）

焚物を履物にする御放埒（文化）

無駄足に移香のする御放埒 (文化)

恁んな類句は非常に澤山あります。勿論此の話は本當の俗傳で史實とは違つてゐますし仙台侯が通つたと云ふ所も別家でありますが之等の句が澤山あるのを見て、如何に江戸ツ子なるものがその「張」なるものを喜んだかを想像する事は難くないと思ひます。「京の遊女に江戸の張を持たせ長崎の衣裳をつけさせて大阪の揚屋で遊びたい」と云つた馬鹿な思想が例の「元祿太平記」に見えてゐますが最も張のありましたのが江戸時代の第一期、萬治頃を中心とする時代で元祿期は大分それより劣つてゐますが、まだ随分「張」を見せてゐたものであります。

所が伊達綱宗の振られた詰を痛快に思ふ江戸の町人もつとめて遊女の機嫌を損じないやうにする、うまく調子を合せると云ふやうな傾向を持つてゐたのであります。此處に於きまして武士道が遊女から町人の方へ盛んに流れ込んだのであります。獨り遊女計りでは無い。武士のあまり好まなかつたお芝居の方からも武士道はひどくつきこまれました。それは淨瑠璃の大立物近松門左衛門が武士の出でもあり武士に迎合する必要上義理を主眼として例へば丹波興作のお乳の人滋野井のやうな人物を多く描きましたし近松に對抗した紀海音なども義理を更に強調した作家で以後の淨作家瑠璃、又それと連絡を保ち發展して行つた脚本作家がそれに學んで行つたとしますれば當然武士道の形式の立派さが演劇に表出せられる譯でそれをよろこびました町人の心にそれも遺憾なく入つて參つたのであります。金をいやしむ風習はかくして江戸の町人にも強く起つて參りました、西鶴の永代藏にも「江戸はわきて町の人心不敵なる所、後日の分別せぬぞかし」(「伊勢海老の高買」)

とあります、川柳にも

江戸者の生れそこなひ金をため (11)

江戸者で無けりやお玉がいたがらす (1)

は此の消息を語つてゐるものであります。否江戸ツ子なるものは金錢に執着を持たぬのみならず、あらゆるものに執着を持つ事を潔しとしなかつたのであります。之も矢張り禁慾を土臺とする武士の思想からの影響と思ひますが此の意味に於て最もよく江戸

ツ子の氣風を代表しますものはあの旗本などとぶつかつた町奴や中ツ腹の魚河岸の兄哥連中だと思ひます、講談によくあらはれます轡隨院長兵衛、唐犬權兵衛、一心太助なんと云ふ連中は事實と講談とは違ひましたにしても江戸ツ子の愛好措く能はなかつたものであります。弱きを助け強きを挫くと云ふ心持も或る程度まで喜ばれ同時に人の爲に頼まれ、ばいやと言ひ切る事が出来ないやうな性質も大分加味されて來ました。元祿時代に關西ではつやつぱい濡れ場の多い戀愛曲がよるこばれましたのに比し江戸では殺伐な時代劇と云つたものが喜ばれてゐた譯ですが更に下りますと之等の諸種の心持から異性に對する態度といふものも上方のそれとは大分違つて參りました。近松の戯曲などを見ますと相思の男女が浮世の義理に阻まれてその戀を永續する事が出来ないやうな場合心中などと云つた結果を導いたやうなものも表はされて居ります。

浮世の義理にすべてが阻まれたら途方にくれるのは弱い人心であります。悲しむなと言ふのは徳川時代の武士道である、悲しめと言ふのは人情である、その衝突に氣の弱い——私はさう言ひたい、近松の作物にあらはれる凡ての男性にそれは共通した心持ですが——氣の弱いものは遂に敗れてゆく、死んで此の浮世で添はれない悲しみを忘れようとする、それ斗りぢや無い、我等の將來には來世がある、二世も三世もと云ふ淡い未來感も伴つて死を選ぶ。之は道徳上から見て面白からぬ現象であります。近松は詩人であつたから此の面白からぬ現象にも同情し理解しあらゆる愛をふりそゝいで戯曲を作つたのですが、その戯曲の中に「潔き戀の手本」などと心中の事を云つてゐる所もあれば、心中大流行の有様も隨所に匂はせてゐます。

けれども禁慾の武士道に影響されました江戸はと申しますと流石此の心中は少くない。あつても人々は戀の手本だとは思はない。馬鹿な奴だと思ふ。

死すべき時に死なざれば日本橋（柳川）に死せざれば日本橋（拾、安永）

江戸の眞ん中へうろたへ者二人（安永）

日本に死にぞこなひが二人也（20）

日本橋馬鹿をつくしたさし向ひ（7）

心底づくで日本へ三日出る (34)

業ざらし日本の地へも二人出る (23)

四日目は非人を通る日本橋 ()

ぬれた中橋の袂で三日ほし (40)

とらはれの入札になるつらい事 (30)

は此の消息を傳へてゐます。之は一つは八代吉宗將軍の下にありました名裁判官大岡越前守忠相が「心中」と云ふ語は忠の義で不隠當である、男女が死ぬのはあれは獸に類する行爲だから以後相對死と改めるべき訓令を發したのにも依りませう。そして心中未遂者は江戸なら日本橋の橋袂で三日間晒の上人前から削るのが法規であります此の川柳は之等をよんだのであります。が御存知の通り徳川時代の幕府の禁令はいつも永く力を持ちつづけて行かぬのでありますから心中のやうなものに同情しないのは矢張り武士道の影響と見たいのであります、又大岡忠相の禁令もそれに基づいてゐるのであります。

従つて江戸の人々は戀はする、がいかに戀しい相手でも、その相手の女が他の男でも思つてゐるやうなら、綺麗さつぱりと女をその男にやつてしまふ、その間に執着も悶着も起さぬ、それが江戸の粹でもありまして、やはり江戸の文藝に慍うしたのがよくあらはれて居るのであります。

江戸の町人は幕府のお膝元だけに武士道の洗禮を受けて或る程度まで禁慾無慾の精神を持つてゐました、尤も江戸と申しましたもいはいゞ諸國の掃溜で諸國から様々な人々が入り込んで居り、又多數の中には多少毛色の變つたものもあつた事がありましたものゝ大體に於て生ツ粹の江戸ツチ、又は江戸ツチと稱する連中は物に執着しないと云ふ精神を強く持つてゐたのであります。従つて遊里である吉原其の他の惡所へ行きましても江戸時代のすくなくも通人は肉に飢えた虎のやうな淺ましい客とは大變に違つて居りました、吉原の如きは一種の社交修養場所―變な修養場所ですが――の如くに江戸時代の一面には思はれてゐたもので、惜しいことあつたら息子律氣なり、 (9)

などの句も一面の消息を物語つてゐます。

然るに淡白さを發揮しました江戸ツ子なるものが、當然禁慾の土台の上に立ち淡白ならざるべからざる武士の肉慾主義を觀ましては、又執着ぶりを見ましては憫笑の感の起りますのも當然だと思ひます。殊にそれが地方からの江戸勤番の武士ほど本能満足を唯一の目的としてゐますだけに、張を學ぶ吉原の遊女あたりから毛嫌ひされたものも數多くあつたのであります。一體江戸町人の淡白さは武士から間接直接を問はず數はつた、而かもその武士がこのやうに淡白でないとしますならば吾人はその間に大きな矛盾を感じます、そして同時にその間に大なる皮肉が存在するやうに觀じるのであります。

所が江戸の遊女も萬治頃即ち元祿前のそれは極めて張が強く品格もそなへてゐたものも數多くあつたやうですが、寶曆明和を中心とします第三期以降は大分品が落ちて參りました。

遊女の墮落は當然それが相手となる客の墮落を意味するものでは無いでありませうか。遊女の生活は心次第客次第の流れの身の上であります、客の心持が遊女を左右すると云ふ事は當然考へられねばなりませんまい。實際武士の墮落も寶曆明和以降一層烈しくなりました、町人とても同様です、けれども依然として禁慾の精神は高くかゝげられてゐたのであります、大なる矛盾大なる撞着がその所に生じて之がすべて嘲笑の種となり得たのであります、殊に町人と武士は階級に於けるのと實力金力に於ける地位とが轉換して事實武士の頭が上らなくなつてもゐましたし、例の町奴以來町人は武士と心からなる融和もない爲、第一に嘲笑を武士になげかけたのであります、それには遊里屋水茶屋揚枝店などに於ける武士の狂態を覗ふのが一番手ツとり早い事でもありましたらう。

川柳にあらはれます武士は私の分類法によりますと、大名、國家老、奥家老、江戸家老、成上り武士、一般武士、などに分けたのであります。その中大名の事はあまり書きますと當局の忌諱にふれると云ふ事もありますので極端な攻撃はいたしません、前に申しました遊女高尾にふりまはされた仙臺公伊達綱宗や、遊女春日野を落籍して放埒を極め遂に隠居を命ぜられた尾張公徳川宗春や、遊女高尾——仙台高尾とは違ひます後の高尾です——にうつゝをぬかして姫路から越後高田二十五萬石に國換を

命ぜられた榊原政岑等數名しか川柳を賑はしてゐないのであります。其の他の一般大名は落語などに出て來ます將棋などをさしてもお飛越勝手と云ふやうな罪のないものが多いのですが長くなりますから一々例をひくのは省略します。

川柳の作家に考へられました國家老は

誰かしらいちめて歸る國家老 (6)

國家老殿と淺黄をしめに來る (16)

國家老べんべこべんを先づ押へ (12)

面白くなくして歸る國家老 (19)

お妾の十九家老は國を立ち (25)

本膳にうまみをつけて國へ立ち (26)

桐の木に花を咲かせる國家老 (51)

玉の輿から引きおろす國家老 (26)

の如く何れもタイプが極つて殿様をいさめ武士どもを叱りつけて淫蕩たる氣風を押へようとする精忠な武士の典型であります。殿とは殿様で淺黄は江戸勤番の地方侍は衣服に淺黄裏をつけてゐたのが多かつたので淺黄裏又は淺黄と云はれるやうになつたのであります。勿論惡口であります。べんべこべんは三味線で先づお妾の使用する樂器であります。お妾の十九と云つたのは十九は女の厄年で國家老から叱られ追はれるので特に厄年を此の句では持ち來つたのです。本膳とは奥方、桐の木に花をさかせると云ふのも奥方に勢力をつけさせる義であります、桐の木とは云ふまでもなく

桐の木の上に雁々十三羽

の句もありますやうに十三弦琴即ち箏であります、お妾は三味線、奥方は琴に堪能のやうに作りますのが、川柳の約束とまでは参りませんが一種の型のやうになつて居ります。その素性正しい奥方の勢力をつけさせて氏なうして乗つた玉の輿からお妾を引

き下ろすのは此の硬骨な國家老の役目のやうに川柳ではなつてゐます。

國家老、曲つた所は腰ばかり（39）

であります、堅い實直な本當の武士たる國家老はその代り洒落の何物かを解せぬものが多いやうに思つたのも川柳作家であります。

國家老、落し、噺の落を掘り、（37）

と言ふのがあります。「この土瓶はもるよ」「ソコまでは氣がつきませんでした」「あちらの家に圍が出来たねえ」「へい」此の一口噺には簡單ながら落がついてゐます、それが解せられぬのが國家老であつたのです。川柳作家のねらひました國家老はすべて立派な人ばかりであります、之は一つは江戸への勤番武士が墮落化してゐてもそのお家が安泰であるから國家老の働き如何によるのだと考へました所もありませうが、多くは芝居や小説の方からの影響であらうと思ひます。

酒池肉林の中へ出る國家老（39）

と川柳にありますやうな國家老は小説に多くも描かれてゐますし芝居にもそんな筋の多いからであります。

江戸家老は江戸勤番のものであります、國家老と反對に之は不良分子であります。

先づお入あられませうと江戸家老（17）

江戸家老若衆根性出したがり（21）

であります。之は國家老を前申し上げましたやうな性格の者となりますとどうも損な役割になりますすが之とても小説や戯曲類を通じて得た知識と諸大名の墮落などから連想した所が無いとは云へませぬ。奧家老は丁度支那で申せば宦官のやうな役割のもので大奥の女中を支配する男ですから勿論血の氣の多いものぢやいけない、年はよばなくのもう人間ばなれしてゐるもので無くてはならない。

奧家老ぐちになる程盛り也（8）

花の外には松ほどの奥家老 (8)

之は「花の外には松ばかり」の道成寺の文句とりであります、奥家老を松にたとへたのです。

どうくにおんぶして行く奥家老 (18)

馬にだらしないのつてゆく奥家老を子供らしい所作であらはしたのです。

奥家老役に立たない男也 (35)

奥家老まさかの時は腰がぬけ (38)

であります、従つて之の方はあまり問題にはなりません。

成上り武士は妹等が殿様のお妾にでも上つた爲に武士にとり立てられた連中であります。

妹のおかげで馬におぶつさり (3)

馬鹿な事妹が死んで武士をやめ (21)

馬の行く方へ乗つてく俄武士 (14)

俄武士けだし妾の兄にして (16)

などでもつ滑稽の代物であります。其他の武士——その中にはお留守居もあります。用人もあります。或は旗本の侍などもあります。——その他の武士こそ川柳作家の好んでつかまへる題材で

つんとした女のそばに浅黄裏 (拾、安永)

あの銀杏何年ほどと浅黄云ひ (全、天明)

此の銀杏は浅草にある二十軒の揚枝店の傍にある大銀杏で揚枝店の女に執着する武士を描いたものであります。

吉原で武道勝利を得ざる事 (全、安永)

捨べきものは弓矢也度々ふられ (全、天明)

川柳を通じて観たる江戸(田中)

淺黃眞度々敗北をして歸り（全 安永）

夜着の損料を淺黃は三歩出し（全 全）

三歩は太夫の相場であります書三とも太夫を呼びますのは書三歩夜三歩つまり一日一兩二歩であつたからです。

人は武士何故町人になつて来る（5）

貴公様とは耻しいとぐけ文（13）

出すまじき所で淺黃武士を出し（17）

恚う言ふのがかなり多く見えます、勿論澤山の句の中には武士の遠乗、諫言、さては小侍浪人等の貧乏生活を描いてゐますものもありますが此の武士の變な執着をあざけつた句が頗る多いのであります。之こそ言ふまでもなく世相の矛盾に川柳子が輕くメスをつつこんだのではありますまいか。

否武士のみならず性的の變な執着を持つ悉くを川柳子はあばいて皮肉や諷刺をあびせかけてゐます、例へば奥女中に於てもさうであります、後家に於てもさうであります、それ等の性的執着を笑ひました句は柳樽にも、「末摘花」などを見ましても誠に澤山残つて居ります、現實の上に於ても有名な例の徳川家大奥の老女で將軍家繼の生母月光院につかへた江島と俳優生島新五郎事件、尾張公未亡人と生島大吉事件のごときは相當世の中に膾炙されたもので、それ以外にも知られないやうなものが澤山あつた事は言ふまでも無いのであります。嚴重な儒教武士道の瀾夢してゐる世に於て之であります、而かも世法があまり嚴重過ぎて其の結果は何を來したか。一面には道德上せめられる事をやつてそれを瀾縫しようとする、又瀾縫せねばならぬと云つた立場が餘計社會の裏に慄然たる習慣を養つたのであります、それは何か、言ふまでもなく墮胎、間引の行爲であります。之は都會は申すに及ばず地方にも甚だ多かつたのであります、暗から暗に葬るとか生れた子を殺してしまふなど云ふ殘酷な事は徳川時代には平然として行はれてゐたものであります。御承知のやうに徳川三百年を通じて人口は常にあまり増減しませんでした。之は一面に墮胎間引が盛に行はれました結果であるとも見られて居ります、それには萬策つきたもの達——主として娘、後家、御殿女

中、下女、踊子の類——が中條と云ふ女醫者の所へ参ります、之は女醫者とは申せ實は墮胎専門醫であります、その手術は川柳から證明もされますが之も此處でお話申すのを憚ります、唯

中條の巧者は一人づゝ殺し、

今迄の事を中條水にする、

中條はむごつたらしい藏を立て、

中將姫のやうなおろしに來る、

(川柳)

明和七年版の「象の鼻」の「はやりこそすれ」の附句に

中條は牛れぬ先の子にかゝり

などとなるのを見ても如何に盛んであつたか想像は出來ませう。間引は生れた子を非人道的にも殺すので之は田舎に多かつたやうです、何がさうさせたか。生活難と本能との不調和にもよります。が最も大きな一つの原因はあまりに戀愛を否定し過ぎて何でもかんでも不義視し而かも、不義はお家の御法度で場合によつては殺されもし、さなくとも重い罪科にあてられる世の中であつただけに一層此の暗中飛躍を盛んならしめたのにもよませう、誠に歎かましい次第であります。

次に川柳にあらはれました僧侶はと見ますと之も亦極度に墮落してゐたやうであります。勿論川柳はある特種の方面のみを覗つてゐる文學でありますから割引して考へる必要のある事は前申上げました通りですが僧侶の墮落も事實はひどかつたのであります。徳川時代には多い時は僧尼の数が百人の國民中一人の割合もありました。それに邪宗嚴禁の世の中でありまして人々は必ず何處かの寺と關係を持つてゐねばならなかつた、奉公するのにも寺請請文が要ると云ふ世の中で坊さんは働かずとも喰へたし又一番坊主になつてれば喰ひはぐれない。坊主丸儲けとあつて一枚の袈裟を纏つてあれば先づ生活苦はすくなかつた時代でありました。従つて悪い事をした者も坊主になれば、譯のわからないものまで頭を丸めると云ふ譯で、怎んなのに戒律が保てたら全く奇蹟です。僧侶の破りました戒律では女犯と申しますが邪淫戒を犯すものが一番多い。

似せ、醫者と人に語るな女郎花、（拾、寶曆）

之は「遍昭の名にめでてをれる計りぞ女郎花われ落ちにきと人に語るな」の文句とりて江戸時代の僧侶が悪所にゆく時には矢張り頭髪を丸めてゐた醫者にばけるのが一番都合がよかつたからです。

本草がものを云つたら傘一本、（全、全）

のうくあれなる御僧駕籠やう、（全、天明）

けさ衣遠く寝る夜の面白さ、（3）

之は途中の中宿に置いて醫者にばけて來るから遠く寝ると云つたのです。

和尚様苦しい顔は二世帯、（6）

人口を衣でふさぐにくい事、（9）

木の端で無いのが海の端をゆき、（11）

僧侶が木の端のやうに思はれるとは「枕草子」に見えます、海の端は江戸高輪あたりで之は品川の遊所通する増上寺あたりの坊さんと見えます。

行く時は小道に寄つて醫者になり、（15）

衣をぬぐと懷劍を和尚出し、（17）

醫者は懷劍をさしてゐたからであります。

朝歸り高輪からは出家也、（4）

音のせぬ様に和尚はどらを打ち、（18）

品川で口がすべると愚僧也、（23）

安房上總ほめく二三戒破る、（14）

之も品川の句です、品川から安房上總が見える事は「山は上總か房州か」と云ふ鐵道唱歌でも知られませう。

中宿へ出家這入ると醫者が出る (19)

慙うした句は澤山あります。お江戸の二大寺たる上野寛永寺の僧侶は吉原又はいろは茶屋に、芝増上寺の僧侶は品川が大きなお得意場でありました。その他

よし町の穴を後住が埋めて居 (拾、寶)

若殿になつたを和尚買ふ氣也 (拾、拾)

よし町の意趣で本寺にいちめられ (3)

よし町は損だと和尚氣がそれる (5)

と云つたやうに男色を買ひに行つた墮落僧もあります。遊女の所へ行くのは醫者に様をかへねばならないがよし町なれば坊主姿でもよかつた、女犯で無いからであります。或は

はしり大黒を和尚はくやしがり (24)

大黒が無いとお寺は富貴也 (40)

大黒を祭る和尚はなまぐさし (42)

大黒を和尚布袋にして困り ()

と云つたやうな梵妻を内證に置くやうな破戒僧もあつたのであります。又さう云ふのに限つて食物の方もいかゞはしいものを持たべたであります。

放生會納所うなぎを餘程呑み (35)

天蓋は酔にくれと和尚いひ (35)

天蓋は蝸の異名であります。

川柳を通じて觀たる江戸 (田 中)

川柳を通じて觀たる江戸（田中）

ふせ鉦や大蓋をくふどら和尚（42）

ふせ鉦は「あはび」の異名です。

こつそりと所化の葬る魚の骨（48）

など云ふのがあります。寛政八年には八月十六日から三日間に亘り女犯の僧が七十餘人捕へられて日本橋の橋だもとに曝された事もありますし、谷中日蓮宗延命院の日道及納所の柳全の女犯事件のごときは相當に大なるセンセーションを與へました、江戸時代には怎う云ふ事が誠に多かつたのは遺憾であります、尼僧の墮落も甚しく歌比丘尼など稱する押賣醜業婦が江戸市中を横行した事もありました。

坊さんと兎角仲のよささうに見えるお醫者様を申しますと徳川時代には鍼醫者が多かつたのであります、之は今日のやうに開業醫になる爲に數年専門的研究をしたり試験に合格せねばならぬと云つた面倒さが江戸時代には無かつたので、本草の書物一二冊と傷寒論一冊位あげたお醫者様がかなりありました。が、それで醫者がやれたのですから學者は勿論浪人でも一寸學問のある連中はよくこのお醫者様をやる。國學の大家本居宣長翁は國學者として名高いが本發はお醫者様であつたのです、兩月物語の著者の上田秋成も矢張りお醫者をやつた事がありましたがお隣の子供の馬皮風——今で申すとデフテリアですね——なのを見立て違ひして即座に盛り殺して以來發心して醫者をやめたのであります。川柳にあらはれて居ります醫者は例の墮胎専門の中條を除きましては外科と内科とに分れて居ります、外科唯今の外科ですが此の方は人を殺す割合がすくない、内科になると随分盛り殺したやうです。

變と云ふ迹道醫者はあけて置き（拾、天明）

とどめをば余人に渡す七加減（全、明和）

醫者衆も辭世をはめて立たれけり（全、拾）

下手さうな醫者葬禮に見える也（13）

命を塵芥のごとく簸擻もり (21)

で中には仲人に夢中になるやうなお醫者で

仲人にかけては至極名醫也 (拾、安、13)

調査し扱てお話の像女の儀 (全、全)

などと云つた愛嬌のあるものもあります、かと思ふと猶あやしい代脈を出して其場を糊塗するものもある、患者の家にあつては之程恐ろしい事は無い。

代脈がちと見直した晩に死に (拾、拾)

代脈答へて死生は天にあり (14)

何ぞ聞かうかと代脈苦勞なり (14)

代脈はやんまを追つた小僧也 (拾、明和)

では心細い、従つて患者の家の方でも

代脈が來たで今板引つこませ (11)

今板は今板併で先づ上品な菓子です。

代脈は何をこいつの氣で見せる (5)

と云つた調子であります。

川柳には下手な醫者ばかりではなく流行醫者をよんだ句も勿論あります。併し人を治癒すべき醫者で人を盛り殺すと云ふ矛盾が多く川柳の皮肉の目のつけ所となつたものでせう、今日と當時の醫者と違つた事は朝回診する事と供のものに藥箱を持たせて行つて患者の家で調査する事(自宅で調査する場合も川柳から知り得ます)——等で藥禮や其他の事情はほど今日と同一であります。

以上は矛盾に對する川柳の攻撃であります、無執着であるべき武士や奥女中の執着、當然夫の菩提を弔ふべき後家の亂行、戒律すべき僧侶の破戒、仁術たる醫の不仁にさうしたものを心から笑つたものであります、けれどもその笑の中に憎みは無い、唯笑ひ皮肉を云つてゐるだけで江戸ツ子は満足してゐたのであります。

所が矛盾に對する笑で無く、川柳には他の笑ひがあります、それは野暮に對する笑であります、その目標に一番いいものは田舎者、居候、下女でありました。徳川時代のそれ等は無學か或は取柄の無いものでした。それは通で無い。江戸ツ子は粹とか通とかを愛好した人種です、心のあかぬけを欲した人種です、之は矢張り武士道の無執着の影響でせうが、が田舎者、居候、下女は通ぢや無い、之を野暮と申します。

川柳では田舎者を侮蔑して居ります。一つは將軍のお膝元に居ると云ふ事を笠に着てゐたからでもありますが一つは當時の爲政者の考がさう云ふ悪い影響を與へたのだと思ひます。何故かならば、農は國の本などと唱へまして士農工商と工商よりも上に据ゑました所存は實際國の本と考へた爲ではないのであります、徳川時代の國の本と云ふ解釋をそのまゝに見ると誤が出来ます。

農は國の本と申しましたのは武士の食物たる米を供給する機械の意味で國の本と云つたのであります、實際武士だけを本當の人間だと思つて居りました時代ですからやむを得ません。堂々たる儒學者の書いたものにも百姓と胡麻とは擇ればしぼる程出すものであると云つたやうなひどい事が書いてあります、農夫の生活は實際今日想像もつかぬ程ひどかつたのでした。と思ふと今日はお互に有り難い時代に住んでゐる事を痛感いたします。江戸ツ子は農夫をそれまでにひどくは見ません、併し何處か野暮がぬけないのを直寫して笑つて居るのであります。川柳のねらひました田舎者は大体に別けまして二つにならうと思ひます。一つは一般の田舎者で或は訴訟の爲に日本橋馬喰町あたりに來てゐる者もあります。江戸馬喰町には田舎者をとめる安宿がありました諸國からふくれた顔は馬喰町、（拾、寶曆）國々の理窟をとめる馬喰町、（拾、寶曆）で江戸に參つて居ります田舎者を掠鳥などと異名をつけてゐます。

むく鳥に引導わたす馬喰町（拾、寶）

掠鳥が來ては格子をあつがらせ（一）

など云ふ句も見えます。

馬喰町ばかり／＼と手をたゞき（拾、寶、3）

などは蓋し寫生句であります。

偶には

野や草を江戸へ見に出る田舎者（31、58）

の狂句にあらはれたやうな江戸に遊山に出かけて來るものもあります。野は上野のこと草は淺草です。が多くは田舎に住みつゝてゐるもので、

頬かむり律氣にかぶる村いさみ（37）

田舎馬士内證咄のさわがしさ（36）

のやうな句の田舎者であります。慥うしたものは兎角野暮や無學が多いので

割箸に田舎大きにこまつてゐる（32）

べからすへせなア繋いで叱られる（35）

などと云つたたぐひであります。第二の田舎者は江戸人の接しましたある特定の國の者達であります。江戸で江戸ツ子の接しました田舎者は下女達を除きましては、三河の萬歳、加賀の鏡餅ぎ越後の角兵衛獅子のやうな類もありましたが、最も江戸人の家庭に入り込んで印象を與へましたのは信濃者であります。一體徳川時代の制度としまして農が勝手に住居をかへ他の職につく事は許されなかつたのですが、信濃のやうな雪の多い國は冬は仕事が出来ないので江戸へ出まして二月二日まで奉公して又歸國します、多くの彼等の職業は米搗であります。其他の筋肉労働も致しました。江戸ツ子が彼等に目を丸めましたのは思ひがけぬ

大喰だと云ふ點であります。それは江戸のやうな土一升金一升の土地にはかりくすぶつて都會生活をしてゐますものにとりましては當然の事でありませうが可愛さうに信濃者は大飯食の代名詞となつてしまひました。

初雪や之から江戸へ喰ひに出る（17）

喰ひぬいて來ようと信濃國を立ち（17）

暴食をしにぞろ／＼と江戸へ出る（18）

信濃者につこりとして喰ひかゝり（11）

猫の分信濃度々斷はられ（15）

一箇國一冬江戸で喰つてゐる（22）

どれ程喰つたか信濃腹がくちい（23）

たべる他信濃はわる氣ない男（20）

しよくの國とは信濃さと知つた振（34）

大飯もくひ澤山な月を見る（38）

之は信濃の田毎の月をした句案です。

五六杯喰つて伯母をすてに行き（22）

捨てられた伯母も全休くらひぬけ（9）

右の二つは信州の姥捨山をよみえらんだのです。信濃者を擬人名化したものでは

かぶ汁で淺間左エ門五杯くひ（拾、明、7）

もりつけた上をおしなはねぢる也（20）

しな介やおはちの底をならしやるな（18）

の淺間左エ門、おしな、しな介は皆信濃者であります、氣の毒にも木曾義仲やその愛妾の巴御前まで信濃ものとして大飯くひに祭り上げられ甚しきに行つては、平家物語は信濃前司行長が作つたと云ふ傳説に基きまして

平家物語大飯くひが書き

平家物語四五杯くつて書き

など云ふ句も見えて居ります。大飯をくふと云ふ事は江戸生活から見ますとあまりほめた事ぢや無い、粹ぢや無い、馬鹿の大飯と云ふ言葉もあります程ですから、川柳の題材となつたのであります、その信濃者は、

豆いりをかみく信濃暇乞 (4)

で二月二日の初灸——この日に灸をすゑると一番利くと云ふ迷信がありまして誰も灸をすゑたもので豆いりは灸には殆んどつきものでした。その二月二日に信濃者は國へ立つたので、

相伴に信濃も三里据ゑて立ち (14)

と云ふ句も見えて居ります、三里は足の三里で膝小僧の下所です。

下女もまた田舎者が多かつただけに川柳の題材となつて居ります。そして山出しの下女が

わらはれる度に田舎の垢がぬけ (8)

で家庭に入つて様々に笑はれて鍛ゑられますが之は女であります爲に、時に主人から、或は奉公人から挑まれて反抗し得ぬやうな弱い女が澤山居りました。今日でもさうしたものがあつてあります。が道徳上面白からぬ事柄のやうに思ひます。

其の手代その下女畫は物言はず (拾、拾)

などは下女と手代との間を歌つたものですが旦那との關係をうたつたもの、澤山の情夫との間の關係をうたつたものは澤山あります。一々あげますのは煩はしいし時に風俗を壤亂する恐がありますのでやめて置きます。

さなくとも下女の一舉一動は粹では無い、川柳はそれを笑ひます。

下女が戀五筋ほどに思ひつめ（41）

下女が戀胸も銅壺もかきくもり（拾、明和）

鐵釧と蚯蚓と下女はとりかはし（10）

鐵釧と云ひ蚯蚓と云ふのは何れも惡筆の事で、彼等の文をさすのであります。

下女が文あたかも話することく（拾、安永）

あかどりで下女天文を考へる（1明）

龜の甲を焼いてそのわれ目で卜すると云ふ話をもちつて來たのです。

白粉をした下女首をついだやう（7拾）

下女が鼻唄臺所のすゝが落ち（14）

いやな下女淺間額につくる也（24）

美しい富士額に似て非なるものが淺間額でせう。

おれも中位だと下女思つてゐる（34）

作つたで下女三段惡く見え（35）

下女が手でバリくたむ緇子の帶（36）

下女がつらくく見れば鼻もあり（38）

殊に下女は無學が多い、無學は又川柳の嘲笑を買ひます。此の種の例も多いが省略しませう。下女は江戸には相模、上總方面から相當に出たやうであります、殊に相模女は風儀を亂す代表者のやうに川柳ではきまつてゐます。

二三日間がありや相模うらみわび（7）

之は百人一首の相模の歌に引つかけたものでありますが相模女の不しだらさは川柳には澤山あります、「末摘花」などを大分賑

はしてゐる下女はこの相模女ですけれど

房州もやはか相模に劣るべき (37)

から見ますと安房上總あたりから來た下女も發展したものと見えます。

下女は大概相場が一年に二兩二歩から三兩位でありました。二兩二歩と申しますと二圓五十錢、三兩は三圓ですが、今日の購買價格をざつと四十倍としまして百圓乃至百二十圓でありますから今日よりはいくらか安かつたと思ひます。そして住込む時には寺請狀が要ります。住み込みは三月四日から翌年の三月の四日までで三月四日が下女の出代りの期節であります。つまり一年契約が多かつたので、氣に入れば繼續もしたものであります。三月四日が出代であつた事は江戸の年中行事などを書いたものには大概のつてゐます、川柳にも

人同じからず三月五日也 (拾、拾)

そちは二世あれは三月四日まで (48)

ひなを仕舞ふと人間の直をつける (16)

の句が證明して居ります。

下女と同様居候も野暮な人間です、大の男が他人の家の厄介にならず事もなく、のんびんだらりと暮してゐる、川柳の作家は之をも随分鎗玉にあげてゐます。但し居候は元はかかり人と云つてゐましたので

懸り人隣へ腹を立てにゆき (拾、寶)

かいり人あのねくをうるさがり (全、明)

七ころびきりと見えたるかいり人 (拾、拾)

七ころび八起と云ふ事がありますが八起はどうもむづかしい。

かいり人たつみ下りに腹を立て (全、全)

川柳を通じて觀たる江戸 (田 中)

たつみ上りは段々聲高になる調子ですが居候は大きな聲で云へぬから「たつみ下り」と滑稽に云つたのです。柳櫓の第二十四篇からかゝり人が居候と云ふ名前になつてあらはれて居ます。

大雪やおれも人の子居候 (37)

あれも人の子櫓ひろひの句をもじつたのです。

居候酔のこんにやくをふだんくひ (全)

酔のこんにやくをくふと云ふのは俗語で酔だのこんにやくだのと云はれる即ちいろ／＼小うるさい文句を云はれて叱られるのを云つたのであります。

居候むしの居所いゝ男 (全)

居候せんたくをした飯をくひ (37)

くさりかす水で洗つた御飯です。

腹の虫遠吠をする居候 (39)

居候二八一つで二度あるき (44)

二八は一杯十六文の蕎麥であります。

其他澤山あります。殊に柳櫓の卅七篇には、居候と云ふ題の下に四十七八出て居ます。矢張りやぼがたゝつて居るのであります。

慙うした諸種の矛盾野暮等には攻撃を加へました江戸の川柳作家は自ら野暮でないと云ふ自信を持つてゐましたし執着もないと考へてゐたのですが同じく人間の淺ましさに、他人の事は見えてもわが身は見えぬ所もありましたでせう。併し勤直に四面四角に手堅くやつてゆく事は町人として一面には貴ばれましたが反面には「あそび」の本質も知らねば野暮なりと見られたのでありました。遊里情調も溺れない程度に知つてゐねば話せぬと云つた馬鹿な考へ方をしたものも教育も素養の低い時代であつただけ

にあるのであります。親も大概はそれを黙許したやうです。

親たちの許しで來ると味噌を上げ (4)

と云ふ句もあります、味噌をあげとは自慢する義です。

一人息子が自分の家にはかり閉ぢ籠つてゐると勞瘁にでもなりはせぬかとの懸念から人に頼んで遊里などにさそひ出して貰ふやうな事をやつた話は小説類にも見え又實際にもあつたやうです、併し度重つて親の金を持出すとなると問題になる、親は子の放蕩もわが家の財産を傾けぬ程度までは大目に見ても苟も親の財産に危害を及ぼさうとすると此處に親權を行使して息子達をいましめるのであります、其のいましめ方は一番輕いのが大目玉であります。

ちとしめてくれうと親父、腹すにゐる、 (6)

人は人なせ歸らぬと親父言ひ、 (9)

旅を見てそしてと親父むづかしさ、 (12)

兩眼くわつと見開いて親父待ち、 (14)

お目玉が越しますと座敷牢となつて息子の外出をはぐむのであります。

桶ぶせと入れかへにする座敷牢、 (4)

座敷牢初手は遊里にとらはれる、 (8)

あはれむべし遂に息子は座敷牢、 (拾、安永)

座敷牢あゝ月われをほろぼせり、 (18)

桶ぶせとは吉原にありました私刑の一つで無錢遊興者を風呂桶のやうなものにふせて往來に出しておくのです。(月)と云ふのは八月十五夜九月十三夜の吉原では金のいる物日でその日に息子が放蕩して金を澤山使つたからでせう。かくなりまするも一面には母親の甘さがありますからで

座敷牢母も手館がものはあり（ ）

と云ふ句さへあります。座敷牢でまだ駄目なのは勘當であります。勘當と申しするのは親子の關係で申しますと親子の縁を切るのであります。西澤一鳳の「井筒源六戀寒暄」にも「勘當したれば赤の他人」（上巻）、又竹本三郎兵衛等の作の「艶容女舞衣」に「思へばく不孝者よい時に勘當さしやつて親に難儀のかゝらぬは云々」とあります。親子關係を斷てば當然法律上の責任が來ないのであります。

この勘當をします手續には町内の五人組へ届けて、勘當帳に記すのが形式であります、江島其磧の「世間息子氣質」の一の第一に「親の手に餘るとて勘當帳に附けて舊里切る」とか、全「世間姑氣質」の五の巻の第一に「今ははや異見もつきて外さま沙汰になつて勘當帳に付けて追失ひ」などと見えます。併し江戸で町人の息子達がやられました勘當は大概の場合この手續をふまぬ「内證勘當」と云ふのが多かつたやうです。

勘當は雪か雨かの揚句也（拾、明）

雪や雨の日には遊里に居住する馬鹿者が往々あつたからです。

勘當のあと甚七がものになり（20）

惣領の甚六が勘當されて弟のものになるとの儀です。けれども

勘當も初手は手代に送られる（7）

こらしめの爲に稻毛の伯母へやり（拾、拾）

など最初はやさしい所があります。稻毛とは今日の千葉縣下にある地名です。併し之が甘い母親ですと

勘當をとうく母はしそこなひ（9）

でよし勘當しても

江戸に居やよとおふくろの未練也（16）

などと言ふ風なので

勘當の中、江戸中の湯に入り、 (16)

近邊にからまつてゐて母を刺ぎ、 (拾、明)

などと云ふ不了簡ものも出来るのであります、大概の江戸に於ける勘當息子はそれ等以外には銚子に行つたやうに川柳では型が極つてゐます。

罪あつて息子銚子の月を見る、 (7)

痛はしや息子銚子の帥になり、 (11)

不孝の罪で鰯引く犬の網、 (26)

の、様を二度受合つて銚子也、 (17)

の、様は月の事です。

銚子からさすらへの身と洒落た文、 (6)

漁師仲間へ入り候とどらが文、 (12)

恙うした句もかなりあります。兎に角田舎へやつて麥飯をくはせると云ふのが一番目をさまさせるのに善い方法だつたやうです

銚子に行きましたのはそれからそれへと連絡があつたのでもありませうし一つには銚子には御承知の通り醬油の製造場がありま

してそこなら裸一つでも働けるし何時でも職工にしてくれるからであらうと思はれます、鰯ひく漁師仲間とは銚子の藩からの聯

想で江戸からの勘當息子がそんな事では渡世は出来なかつただらうと思ひます。悪い了簡が直れば勘當を許されて歸るのが普通

の様です、矢張親子の情愛はあるからでせう。

勘當を麥で直して内へ入れ、 (2)

麥めしできたへ直して嫁をとり、 (3)

川柳を通じて觀たる江戸 (田中)

麥めしの後あやまつて改り（19）

からたちになつて勘當ゆるす也（）

江南の橘江北に植ゑると枳になると云ふからう箇の直るのをこゝでは面白く云つたのです。が

勘當のゆりた祝にまたこける（11）

ふして惟みれば又行きたくなり（21）

孝行もしたし身受も猶したし（36）

で又勘當をされると

勘當も二た銚子目でゆりかねる（22）

と云つた場合も出來て來るのであります。

息子の道樂をやめさせる手段としては親は結婚をさせたやうであります。けれども此の結婚は親同志があらかじめ定めて子供にすゝめるでありますから、當人同志の意志がびつたり行かぬ場合もあり得ます。殊に其の結婚も最初は仲人口を聞いてとり極めるものが多いだけ時には幻滅の悲哀を感じる事がある。仲人口と云ふものは昔も今も兎角いゝやうな事を言ふもので——又さう云はねば縁がまとまらぬからでもありますが

四百づつ兩方へ賣る仲人口（拾、拾）

兩方で嘘八百になるのです。

仲人は小妬一人殺す也（4）

殺すといふのはかくす義です。

謠まで嘘で仲人おつつける（46）

高砂やの謠も本筋でなくあやしいものとの義です。

藏も隣りのだと仲人しめられる (16)

などと云つたひどいのがあり

瓜實を見せて南瓜ととりかへる ()

などと換玉を使ふやうなわるい手段を弄するものもあつたのでありますから随分幻滅が諸所に起つたのであらうと想像します、それも男はいゝ、女は極端に人格を無視されてゐるだけに堪つたものじや無かつたのです。持參金附の嫁一恚う云ふのは大概美しからぬ嫁でしたが川柳ではその持參金の相場は大体に於て百兩と定つてゐます、百兩と申しますと今の購買價格に直しまして四千圓ですから、まあ之は一種の云ひ方でありませうが川柳での持參金の型は百兩となつてゐます事を御記憶願ひます、之は百兩と申す嫁にて候、

謡曲「羽衣」の之は伯良と申す漁夫にて候の文句とりです。

百兩は無くなり顔は残つてゐる ()

などとありますが此の中の一割の十兩は仲人に禮金として與へたものです、従つて百兩の持參金附の嫁でも

暮の嫁されども手取九十兩 ()

で十兩缺けてゐるのであります。此の持參金附のを離婚します時には矢張百兩は持たせてやらねばならないことになつてゐました。

去る時は九十兩ではすまぬ也 ()

の句が證明してゐます。ですから持參嫁は先づ持參金だけ出来るまでは安心ですが一般には女は損で七去と申しまして七ツの離婚條件がありました。七去と申しますと大寶令の規定によりますと、¹無子、²淫迭、³不事舅姑、⁴口舌、⁵盜竊、⁶妬忌、⁷惡疾で之は儒教の方からの影響で「小學」にも「婦有七去」、不順、父母去、無子去、淫去、妬去、有惡疾去、多言去、竊盜去とあり之は更に禮記によつたものであるとするとその基源は古いのであります。江戸時代には之が實行されてゐたのです。夫の方が

ら勝手に三下り半の離縁状をつきつけても女の方からは絶対出来ない、夫はそれに自分勝手に遊びまはる、と云ふやうな事になりますと妻は誠に心細い譯であります。

花嫁のうきが友には百人一首（一）

と云ふ句があります、先づ花嫁のお得意なものは百人一首とお娶位でそれだけがせめてもの慰み、若し姑でもあれば餘程心づかひをせねばなりませんでした。本年の高等教員検定試験問題に出ました

嫁のあら水晶越にながめられ

は

眼鏡越大きく見える嫁のあら

と姉妹の句で眼鏡ごしに嫁の缺點を見ると云ふわけで兎角姑とは仲がわるかつたのですがその姑の機嫌をとりつゝも夫につかへる、たとひ夫が放蕩でも我慢せねばならぬ、徳川時代の戯曲小説を通じて女性が特に没我傾向が著るしくやさしい心根に見えますのは此の運命を甘受してゐたからですぐたてつく女性には見えぬ奥床しさが漲つてゐたのでありました。結婚後の女を川柳の方から眺めると私は區別がつきたいと思ひます、それは花嫁——之は兎角恥しがり屋です、いちらしい可愛い心を持つて小さくなつてゐる。それが子をうむと花は根にかへつて嫁になります、女房となるのはそれからです。その他内儀、妻などと區別してゐます。しかし段々すれて参りますと夫の不身持などの折自分も同情して呉れる他の異性へ頼ると云ふやうな淺ましい事が出来こゝに不義が生れる事があります。江戸時代にはかなりさうしたいまはしい事柄がありました。其の他にも、旅行の不便で夫などが長旅に日數を要した事、極端に女の自由が奪はれてゐたなども原因になつたのですが一つには在來は姦通は死刑であつたのが本夫の承認さへ得れば示談ですむやうな習慣が出来だしましてからこんな不幸が一層多くなつたやうで誠に苦々しい事と思ひます。その示談金は金なら五兩、銀なら三百目（銀六十目が金一兩です）。であつた事も川柳で知り得られます。

首代を負けて勘忍五兩とり（50）

あやまつて改る代、二千疋 (13)

進上申す首代は、二千疋 (39)

二千疋は五兩です。

生けて置く奴では無いと五兩とり (10)

三百ですめば禮儀も安いもの (39)

勘忍をして三百目落手する (41)

などと云つた有様であります。

不義は別として女には自由が無かつた。だが絶対に女に自由が無かつたかと申しますと唯一つ許されたものがあつた、それは鎌倉の松岡山東慶寺と云ふ尼寺に三年間有髪の尼となつてゐると女の方から離婚が出来たのであります。

出雲にて結び鎌倉にてほどき (文化)

縁なき衆生を濟度する松ヶ岡 (文政)

三年の戀もさめるは松ヶ岡 (文化)

鎌倉を出づれば桃や栗が成り (安永)

桃栗三年柿八年で桃や栗で三年の歲月を語つてあります。

手の切れるまで鎌倉に居候 (文政)

星月夜あさる程見て縁を切り (全)

星月夜は「鎌倉山の星月夜」と云ふ文句をとつて鎌倉を匂はせたのであります。

夢ばかりなる鎌倉に、三年 (寛政)

百人一首の「ゆめばかりなる手枕に」の文句とりです。

川柳を通じて觀たる江戸 (田中)

川柳を通じて観たる江戸（田中）

ものゝふは日歸り嫁は三年目

武士が鎌倉までよく日歸で遠乗をやつたからであります。

去り狀をとる内年が三つふけ（明和）

高砂にいびられ嫁は松へ逃げ

高砂は尉と姥で舅姑をさしたのです。

入相の乳房にひびく松ヶ岡（文政）

生れた子供をあとにして身一つで逃げこんでゐるからです。

張つてゐる乳は菊岡松ヶ岡

菊岡は有名な三味線屋で八ッ乳の猫の皮でも張つてゐるのせう。

女のかげ落六郷さしてゆき（）

六郷は川の名前東海道にあつて鎌倉までそこから九里ほどあります江戸からは四里です。

すは鎌倉の大事ぞと仲人來る

九里あるよいそがつしやいと渡し守

渡し守は六郷川のです。

むつかしさならはぬ旅の十三里（文化）

十三里は江戸鎌倉間の距離です。

鎌倉へ嫁あるいてもく

百三十里も嫁は行くおもひ（安永）

十信も遠いやうに思ふのは女だからでせう。

十三本とうく、榎嫁は越し、（安永）

榎は一里ごとに植えられてありました所謂一里塚で十三本鎌倉までの十三里を示してゐます。

妻持たぬ身もましかやと尼公云ひ、（天明）

くやしうば尋ね来て見よ松ヶ岡、（天明）

「芹屋道満大内鑑」の「こひしくば尋ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉」の文句とり。

榎でもいけぬと嫁は松できり、（寛政）

榎は縁切榎、松は松ヶ岡であります。

慇うした句は澤山あります。中には圖々しい女は不義を續行したいが爲に此の尼寺に逃げ込んだものもあつたやうです。

まだ私はあらゆる女性や悪い慣習、江戸時代の迷信、たとへば厄年、丙午、勞疹と黒猫、暮の市の大黒盜、其他諸種の飲食物とか江戸の文化をさぐる大きな題目である演劇史方面、遊廓史等詳しくお話申上げたいのでありますが、到底僅かな時間では申し上げられませんか今日は之で割愛させて頂きます。

唯、最後に私は慇う云ふ事を皆様記憶して頂きたいと思ふのであります、即ち何時いかなる文化の裏にも必ず暗い影がつきまとつてゐるものであります、江戸時代に極端な禁慾主義を強調しました反面には又恐ろしいやうな非人道的な事があつたのであります。光のみ見て影を見ぬと云ふのは紳士の淑女的態度でありませう。併し一面にその暗い所のあるのを察して反省し暗さをよりすくなくするのが又我々のつとめでは無からうかと思ふのであります。川柳はもとより教訓のための文學ではありません、けれども江戸時代奉行でも資格の一つとして川柳が解せられねばならぬとされましたことは教訓のためで無く人情の機微を察し狂瀾を既倒にかへしたいが爲では無かつたでせうか。川柳を見ますと一面には時代の裏の裏が見えすぎます、がそれを見せつけられて正濁合せて考へ本當の江戸時代と云つたものの概念が得られるのではありますまいか。

聞く所によれば高等學校教員檢定試験問題に於ける徳川時代文學の成績が極めてわるいとの事であり、そして毎年必ず出

すと云はれて居りまする川柳の課題は吾人の常識を問はんとするものであります。私は江戸時代の文化を考察する上に於きまして川柳が重大な参考資料の一つであると云ふ事だけを皆様に御記憶願へばそれで満足なのであります。